

朝九時に手術室に入って、出てくるのは夜の七時だ。まさに大手術である。だからこそ、この手術を無事乗り越えることができたなら、私は変われるのではないか。苦痛や恐怖心が私を鍛え、ちよつとやそつとのことでは動じない強い心を持った人間になれるのではないか。自己血で手術をするには一六〇〇ccの貯血が必要で、そのために毎週一回づつ四〇〇ccを四回に分けて採血することになっていった。ところが、最初の採血の二日前、私は太い針の付いた巨大な注射器を突き立てられ、体中から血を抜かれる夢を見て、夜中に目が覚めた。やれやれ、こんなことじゃあ先が思いやられる。七月二一日（水）、採血当日。採血前の準備が終わると、瀬本先生が現れた。母が驚いて「えっ？先生がなさるんですか？」と尋ねると、先生は「ほらな、みんなびっくりすんねん。」と看護婦さん達に向かっ言った。何と

入浴と続き、その合間に各種検査も入るので	昼食、リハビリ、再びコトレル牽引、夕食、	に始まり、朝食、コトレル牽引を二セット、	ら、病院生活は意外に忙しく、朝七時の検温	時間を持て余すんじゃないかと思っっていた	離れての病院暮らしが始まった。	後、八月四日（水）に私は入院した。家族と	七月二八日（水）に二回目の採血を終えた	なかった。	の中で巨大な注射器に追いかけることは	るなんて、なんとも不思議だ。それ以降、夢	の中でこんななにゆったりとした時間が流れて	たり笑ったりしながらくつろいでいる。病院	その間、先生も看護婦さんも母も冗談を言っ	した。そして、ゆっくり血を抜いていく。	ん。」と言いながら、私の腕に細い方の針を刺	んから、やっぱりこっちの細い方にしよんね	ねんけど、こんな自分のはよう使わへ	生は「こっちの太い針でした方が速う採れる	先生自ら採血してくれらしい。そして、先
----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	-----------------	----------------------	---------------------	-------	--------------------	----------------------	-----------------------	----------------------	----------------------	---------------------	-----------------------	----------------------	-------------------	----------------------	---------------------

聞く。これまで折りに触れ聞いてはいたが、改めて全体を通して聞くと緊張せずにはいられなかった。それにしても、いつも思うことだが、瀬本先生は正直だ。私にとってリスクになることも、先生にとってデメリットにならなくても、すべて正直に話される。八月一五日（日）、A君が退院する。母が最後のチャンスだから是非とも話しに行こうと言う。母はA君を見た時から「あれはどきどき側弯をかかえながら、あんないい顔をしてるんだから、絶対ええ子に決まってる。」と訪ねた。A君は退院前の昼食を撮っているところだ。A君は私より三才年上の十八才で、大阪のB病院の先生に診てもらって器具治療を続けていたのだが、徐々に肺がつぶれて呼吸が苦しくなり、痛みもひどくなったらしい。そのことを先生に訴えても「これで大丈夫だから」と取り合ってももらえず、瀬本先生にたど

思	く	と	あ	上	夜		も	モ	よ	杯	通	過		よ	何	そ	三	「	り
い	し	が	の	が	は	八	手	ア	り	の	り	ぎ	八	う	と	う	年	こ	着
が	て	で	時	っ	あ	月	術	を	も	こ	一	ま	月	に	か	だ	早	れ	いた
込	く	き	の	た	ん	一	に	忘	っ	と	一	で	一	な	痛	。そ	か	は	た
み	れ	る	光	と	な	七	耐	れ	と	を	時	眠	六	っ	み	れ	っ	、	時
上	た	。と	景	たん	に	日	え	ず	辛	し	前	れ	日	た	は	た	ま	は	手
げ	瀨	同	は	、	ぐ	(ら	明	い	て	に	な	(と	な	ら	っ	手	遅
て	本	時	、	体	っ	火	れ	る	経	く	は	か	月	い	な	な	す	遅	れ
く	先	に	今	が	す)	る	。と	験	く	眠	っ	、	う	く	あ	ぐ	れ	状
る	生	、	でも	ガ	り	手	。と	思	を	生	っ	た	呼	こ	、	：	に	態	で
。	や	私	は	タ	眠	術	え	え	し	き	た	吸	と	だ	、	：	は	、	さ
	ス	の	っ	ガ	れた	は無	た	た	て	て	ら	も	。		呼	。	で	、	す
	タ	た	き	タ	たの	事終	の	の	き	しい	しい	普	と		吸	き	へ	が	の
	ッ	め	り	タ	に	わ	だ	を	た	が	が	通	お		も	ん	で	先	生
	フ	に	思	震	、	っ	だ	見	A	、	私	に	よ		。	で	。	生	も
	の	最	い	え	手術	た	。	て	君	、	は	で	ぶ		お	。	。	の	も
	人	善	出	出	台に	。		一	が	ユ	い	き	大		っ	。	。	先	も
	達	を	す	した		前		私	、	ー	つ	る	手		し	。	。	生	も
	へ	尽	こ	。					私		も		術		ゃ	。	。	も	
	の												の		っ	。	。	も	
													末		た				

手術の二日後、思いがけない手紙が病室に届いた。A君からだった。手紙には「術後の調子どうですか？最初は、リハビリしんどいと思うけど、ぼちぼち慣れて行くから頑張っ
て下さい。チタンの棒、違和感あると思うけど、オレは、三ヶ月位したら慣れました。：
この夏は、私にとってさまざまな人との出
会いの夏となった。このことが、私の中で何
を生み出していくのか、今はまだ分からない
だが、それがどういうものであれ、私が「何
のため生きているのか」を考えるに必要不
可欠なものである。うことは間違いない。
私は、自分がこの病気になったことを不幸
だとは思わない。もちろん、私の病気はこれ
からも私を苦しめるだろう。しかし、もし私
がこの病気になるならなければ、誰も
当たり前前
当然と思うことの中に、実は人間にとって重
要な意味や価値が存在するのだ、
ということ
に気づくことはなかつたと思う。
、